

# 世界の民族人形展

秋田市出身の故 石井 彪 氏によりご寄贈いただいた、世界約 40 カ国の民族人形のうち、「世界の民族人形展」で約 100 体を展示いたします。故石井彪氏は、アジア・ヨーロッパ・南北アメリカ各地を巡ったなかで、その土地土地の民族衣装を着た表情豊かな人形を収集してこられました。各地で出会った、失われつつある手作りの素朴な人形たちが、皆さまを世界の国々へとお誘いします。

開催日程 平成20年 7月15日(火)～平成20年 8月31日(金)









## 「世界の人形」展示に寄せて

### 秋田の国際人、石井彪さんの遺したもの



国際教養大学図書館長 勝又美智雄

国際教養大学の図書館に展示している「世界の人形」は、秋田市出身の故石井彪（いしい・たけし）さん（1914～2003）が生前、長い海外生活の中で丹念に収集していた欧米アジア約40カ国の人形200点以上の中から、ご遺族の好意で特に本学のために寄贈していただいた約100点です。コレクションのほとんどは1960年代初めまでに制作・市販されていたもので、既に半世紀以上経っていますが、保存状態がよく、長い年月の流れに静かに耐えてきた「歴史的価値の高い民芸文化財」として、今日でも十分鑑賞に値するものとなっています。それに加えて、本学の教職員有志が提供した人形もいくつか入っています。

本学は「国際的に活躍できる優れた人材を育てる」ことを目標に掲げています。日本中、世界中から集まってきた学生たちが異文化に接触し、多様な文化それぞれの個性と価値を認め合い、尊敬しあうことを学ぶ場になっています。その象徴として「世界の人形」たちが仲良く共存するこのコーナーで、見る人たちが心を和ませ、「異文化共生社会」のシンボルとして楽しんでいただければ幸いです。同時に本学の学生、留学生、および市民の皆さんの好意で今後、人形の数がさらに増え、展示スペースが広がっていくことも期待しています。

そこで以下に、寄贈してくれた故石井さんの人生と生き方について私なりに素描し、人形を鑑賞する人たちへの参考にしてもらいたいと思います。

#### 石井彪さんの生涯

石井さんは1914（大正3）年、秋田市生まれ。父は漢学者で秋田師範（現秋田大学）の教師でした。32（昭和7）年に秋田県立秋田中学校（現秋田高校）を卒業し「海外雄飛」を期して東京外国語学校（現東京外国語大学）ドイツ科に入学。同校を37（昭和12）年に卒業して外務省に入り、外交官としてイタリア、オーストリア、ドイツに駐在しました。45（昭和20）年にヒットラーの死でドイツの首都ベルリンが陥落する直前に脱出し、イタリアのミラノでムッソリーニ首相の処刑を目撃しました。終戦直前にミラノで連合軍にスパイ嫌疑で逮捕され、さらに捕虜として1年間ナポリ近郊の収容所に拘留され、帰国できたのは46（昭和21）年でした。

## 夏休み特別企画

戦後は外務省在籍のまま秋田県庁に出向して渉外課長、外事課長、観光課長などを務め、54（昭和29）年に法務省に出向して入国審査官となり、55（昭和30）年から61（昭和36）年までイタリア、ブラジルの日本大使館で領事を務めました。

62（昭和37）年、秋田に戻ってからは県民会館長、県立図書館長、日米文化会館長などを兼任し、80（昭和55）年から社会福祉法人山王保育園理事長、わかば幼稚園理事長、秋田県民共済生活協同組合理事長、秋田日米協会会長、日本海洋少年団秋田県連盟会長などの公職を長く務め、のちに秋田市の文化功労者に選ばれました。

戦前・戦中・戦後と通算15年間、外国で生活した体験から、早くから「これからは国際化の時代が来る。これからの若者は国際感覚を身につけなければならない。そのためには外国事情をしっかりと学ぶ必要がある」と説いて、駐日公使と協力して秋田に日米協会をつくり、県民の国際理解を高める運動を長く続けました。その意味で石井さんは、秋田の国際化を進める指導者の一人でした。著書にエッセイ集『ローマの屑籠』、訳書に『ムッソリーニの最後』などがあります。



1996年夏、郵船クルーズ「飛鳥」が秋田港に寄港した折に招待客となった石井彪・俊子ご夫妻

石井さんが人形の収集を始めたのは戦後のローマ勤務時代のこと。大阪出身の俊子夫人との間に3人の娘に恵まれ、当時七五三のお祝いをする娘3人に玩具を買い与える中で、いろんな人形に関心を持ち始めました。ローマの露店（通称「泥棒市」）を歩き回っては、“掘り出し物”を探し出すことをささやかな趣味にして、休日には娘たちをヨーロッパ各地の観光地を案内しがてら、気に入った人形を集めました。人形は娘たちにも触れさせずに、陳列ケースに収めて防腐剤をいれ、大切に保管していたそうです。サンパウロでは素焼きの土偶などが特に気に入ったようで「面白い」とじっくりと鑑賞していました。

人形集めは62年に秋田に落ち着いてからは止め、大きなショーケースに飾って来客に見せていましたが、コレクションに感心した人たちが外国旅行土産で買ってきてくれたものをコレクションに付け加える程度だったとのことでした。

石井さんの人となりを遺族にうかがうと、外交官らしく明るい社交的な性格で人の世話をするのが大好きでした。ウイスキーの水割りを片手に話しに興じ、ナポリ民謡などイタリアのカンツォーネを原語で歌い、カラオケでは「サン・トワ・マミー」「ろくでなし」などシャンソンを好んで歌っていたとのことでした。

ただ社交的とはいっても、竹を割ったようなはっきりした性格で、好き嫌いも明確に言う。秋田県人の弱点というべきものに安住している人たちに対しては面と向かって厳しく批判する面も持ち、

## 夏休み特別企画

ものの考え方についてもいい点、悪い点をはっきりと言うため、中には石井さんを煙たがる人たちもいたようです。

そうした石井さんの言動の背景には、秋田県民に対する深い理解と厳しい批判があると私には思われます。71（昭和46）年、全国の県民性を比較した評論集『わが風土』（明玄書房刊）に寄稿した石井さんは、秋田県民について次のように記しています。

「秋田県人の性格は、表面は常に外部に向かって開かれているのに対し、生活の形態や中身をなす感情の動きは、むかしのままに保存され、秋田人の特異な心理をつくりあげている。外部に対しては比較的猜疑心や警戒心が薄く、好奇心をもって迎え、親切をつくし、その影響も表面的には敏感にうけるが、そこからさきについては外来の影響を頑として拒否する。いかなる社会変革も徹底的な形を取ることがなく、古いものが表皮の下に思いがけない生命力を持ち続けている」

「秋田の着倒れ、食い倒れというのは、秋田の人にとって、その豊かさを表現している言葉として、いささかの抵抗もなくうけいれられてきた。それが自己満足からその人間性まで満ち足りた水準にあるものと錯覚され、その上に優越感を抱いている」

「（秋田は藩主佐竹義敦、小田野直武、平田篤胤、佐藤信淵、安藤昌益など著名な文化人が多数出ているというが）このような多くの人材を輩出しながら、その業績はすべてがきわめて断続的で、継続の効果はみられない。秋田県が、かつての『種まく人』や『北方教育』運動発祥の地でありながら、見るべき躍進もなく、世人の関心が薄いのは一つの良い例である。秋田の和歌、俳句も、一時花をひらきながら、追求のきびしさから逃れ、それが地域文化の独特の創造までには結びつかなかった。・・・一方では感受性に富みながらも表現力に弱い、現実逃避の性格がかたちづくられ、これが文化の継続性や創造性をなし得なかった一因となった」

「文化とは、常に普遍性をもつものであり、明日の文化につながるものでなければならない。ややもすれば秋田県人は懐古趣味におぼれ、ある意味においてこれが秋田の現代的発展をはばむ一因ともなる。・・・ともすれば、新産都市の繁栄が、退廃的な文化を芽生えさせる危険性を包蔵しているとき、調和ある進歩を基礎にした新しい県民性と新しい近代的風土をつくり上げる責任を、われわれ秋田県人は自覚せねばならないだろう」

こうした考えに基づいて「新しい県民性と新しい近代的風土」をつくるきっかけとして秋田の国際化を強く求めていたことが容易に推察されます。

石井さんは2003（平成15）年、春先に転倒して足の骨を折り、寝たきりになって2ヶ月後の5月7日に亡くなりました。それまでは出歩くのが好きで、倒れるまで元気に近所を散歩していました。享年89歳。戒名は慶雲院彪嶽道潤居士。「慶雲院」は長寿の人につけられる院号で、文字通り、大往生とも言えます。「葬式は出来るだけ地味に」との遺言に従って、遺族は官庁やマスコミに連絡しなかったため、葬儀の参列者は200人くらいでした。それでも、あとから伝え聞いて外務大臣や県庁幹部、秋田市長らからの弔辞や花輪が霊前にたくさん届けられ、焼香に訪れる人も多かったということです。

## 夏休み特別企画

なお俊子夫人は2001年、喜寿を迎えた年に亡くなっています。戦後、法務省の人権擁護委員、秋田の家庭裁判所と地方裁判所の調停委員を長く務めて法務大臣から褒賞を受けており、夫婦で秋田県民に貢献していました。

「考えることは誰にでもできる。それを実行するか否かでその人の真価がきまる」。

これが石井さんの生涯を貫くモットーでした。そこには同郷人に対する冷静な見方と、「秋田の総合文化を創造させるべきだ」との熱意とが織り交じっています。そのひとつの結晶が、ここに展示した「世界の人形」にあります。石井さんの遺したものを若い世代が改めて受け止め、しっかりと継承していくことに大きな歴史的な意味がある、それはA I Uの学生たちの責務でもある、と私は考えています。そんな思いをこの展示品から感じ取っていただければ幸いです。

(2008年7月記)